

## 第24回日本水大賞 応募用紙

(整理番号： )

活動の名称	フリガナ カワノブンカノキロク ニイガタケンウオノガワリュウイキヲチュウシンニ 川の文化の記録——新潟県魚野川流域を中心に									
記入年月日	活動主体					活動分野				
年 月 日	該当する活動主体に○ (1つまで)					主な活動分野に◎ (1つまで) その他関連する活動分野に○				
	学校 ( )	企業 ( )	団体 ( )	個人 (○)	行政 ( )	水防災 ( )	水資源 (○)	水環境 (○)	水文化 (◎)	復興 ( )
活動主体の概要										
活動主体 の名称 (個人応募の 場合は個人名)	フリガナ トカド ヒデオ 戸門 秀雄									
代表者名 (団体の場合)	フリガナ				設立年月日					
所在地	フリガナ		都・道 府・県			市・区 郡		区・町 村		
主な活動地	新潟県魚野川流域および東日本各地の溪流									
組織の概要 (個人の場合は 履歴を記入)	1952年、埼玉県入間市生まれ。高校卒業後、考古学を志したが、溪流魚の魅力に取り憑かれ、1976年、天然の溪流魚と山菜・キノコの料理を提供する店「郷土料理ともん」を入間川の畔に開店。以来、釣りと食材集めで各地の溪流を訪ね歩き、職漁師の暮らし・漁法・漁具を記録してきた。新潟県の魚野川流域には、1974年から半世紀近く通いつけている。									
応募活動の概要： 2021年1月『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』を上梓した。全国有数の豪雪地帯で米どころ、酒どころの魚沼地方を流れる魚野川は、魚種が豊富で、これを獲るための漁法も多い。初鮭1匹に長岡の殿様が米7俵の褒美を与えた古い歴史があり、サケの待ち川漁、鮭魚明神、鮭頭石、サケずしのほか、イワナ当番、イワナずし、川マスのカギオロシ、アユの釣り子など、独特の漁法や習俗、文化が育まれてきた。埼玉県入間市で郷土料理店を営みながら、45年間にわたり魚野川に通い、さまざまな魚の漁法や漁具、食べ方、川にまつわる伝承などをノートに書き留め、本にまとめた。										
応募活動のアピールポイント： ◆半世紀にわたり魚野川に通い、川漁師・関係者62名を取材。 ◆種々の魚の漁法・漁具・食べ方・伝承を古老から聞き書き。漁と手仕事の現場を取材。 ◆往時の写真や秘蔵の絵画、名人の道具など、貴重な図版多数。										
これまでの受賞歴：戸門本人の受賞ではないが、2013年の著書『職漁師伝 溪流に生きた最後の名人たち』で紹介した長野県の志賀高原漁業協同組合が、「魚を守るには山を守れ」で日本有数のイワナの漁場を保全した功績により、第48回吉川英治文化賞を受賞した。本の内容が高く評価されて受賞に至ったため、戸門も吉川英治国民文化振興会から授賞式に正式招待された。 ※日本水大賞における これまでの応募実績：第( )回、受賞歴：第( )回( )賞										
「日本水大賞」をどこで知りましたか？(数字に○印を付けて下さい) ①. 新聞広告      2. 官庁内ポスター      3. 日本河川協会ホームページ      4. 水大賞事務局からの案内 5. 国の機関からの誘い      6. 県・市町村からの誘い      7. 教育関係機関 8. 日本河川協会ホームページ以外のインターネットの情報      9. その他( )										

(整理番号： )

## 活動の概要

## 目的：

越後魚野川の流域には、その雪深さゆえに、古くから独特の文化が育まれ、守られてきた。雪はすさまじい脅威であるとともに、共生の対象でもあった。江戸期の雪国百科全書として知られる鈴木牧之著『北越雪譜』には、この流域の風俗、生活、方言から、雪の結晶、動物と人のかかわり、奇譚まで、雪国の文化の諸相が挿絵を交えて詳細に記録されており、この時代のベストセラーとなった。

現代においても、全国各地の河川から失われてしまった個性豊かな川の文化が、雪に守られた魚野川流域には、まるごと残されていた。それを記録に残す作業は、『北越雪譜』の延長線上にあると同時に、前人未踏の領域でもあった。川漁師の仕事は、流域のさまざまな生命や職種とつながり、小宇宙をなしている。それは多くの人々の生業や手仕事によって守られてきた川と人との共生関係の体系でもある。その全体像の記録は、どこにも存在していなかったし、困難が予想された。しかし、今やらねば、多くの川の文化が消えゆき、忘れられてしまう。その一心で、川の文化の記憶と記録を未来に伝えようと試みた。川は海に向かって流れるばかりではない。川は未来に向かっても流れていると信じるからである。この川の文化の記録が、やがて訪れる川と人との共生の時代の礎になることを願っている。

## 内容：

半世紀にわたり東日本各地の溪流を訪ね歩き、職漁師の暮らし・漁法・漁具を記録してきた。なかでも新潟県の魚野川流域には、1974年1月5日から45年間にわたり通い続け、さまざまな魚の漁法や漁具、食べ方、川にまつわる伝承などをノートに書き留めてきた。『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』は、その集大成である。2015年3月3日～2019年9月3日、本にまとめるための取材を行なった。現存する漁法については現場を取材し、失われた漁法については往時を知る古老から話を聞いた（すべて手弁当）。

## 【関連事項】

戸門の知見について、河川漁撈の民俗考古研究の第一人者、故・小林茂氏（秩父の民俗・民具の著名な研究者で、膨大な民具・漁具を集めた国の重要有形民俗文化財“小林コレクション”でも知られる）は「漁具を見ただけで、ここまで語れる人はいない」と評してくれた。

2004年、埼玉県入間川流域の4市1村が合同で開催した企画展「入間川再発見！」では、「入間川の漁と川釣りの世界」コーナーの展示・図録に協力。

元埼玉考古学会会員で、若き日の論文に「埼玉県西南部発見の先土器時代資料」がある。

ダイワ精工（現グローブライド社）のアドバイザーも務め、大物喰わせ釣り用の溪流竿「碧翠」「碧羅」を共同開発した。

溪流釣りおよび山菜・キノコ採りの名人、川漁の研究者として、関連するテーマの講座や講演会で講師を務める。

現在、入間市料飲業組合理事、入間市食品環境衛生協会指導員。入間市技能功労者（和食）。

## 【論文・著書】

「埼玉県西南部発見の先土器時代資料」（『埼玉考古』10号、埼玉考古学会、1972年）

『山の魚たちの午後 溪流歳時記』（JICC 出版局〈現・宝島社〉、1985年）

『溪語り・山語り 山人たちの生活誌』（山と溪谷社、1990年）

『キノコ おいしい50選』（恒文社、1999年）

『山菜・木の実 おいしい50選』（恒文社、2000年）

『増補版 キノコ おいしい50選』（恒文社、2007年）

『増補版 山菜・木の実 おいしい50選』（恒文社、2007年）

『職漁師伝 溪流に生きた最後の名人たち』（農文協、2013年）

『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』（農文協、2021年）

活動期間 自 1974年1月 ～ 至 2021年1月（通算 45年0ヶ月）

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入して下さい。

(整理番号： )

**活動の必要性・緊急性：**  
 現在、日本の多くの川に堰堤や取水堰、ダムが構築されているが、川は日本列島の血管であり、血流が滞れば種々の病弊が発生する。特に川と海を往来して生きる魚種への影響は甚大である。近年はゲリラ豪雨による急激な増水や氾濫防止のために平野部の多くの川が直線的な流路に改修され、カワウや外来魚（ブラックバス、ブルーギル等）による在来魚の食害も深刻で、個性豊かな日本の川は姿を消そうとしている。豊富な雪解け水の流れる魚野川は、水量も多く、魚種も多彩なために、漁り（すなどり）に携わる人も多く存在する。特徴的な魚食文化、漁りの伝承など、“川の文化”に溢れている。しかし、その文化の担い手が一人、また一人と鬼籍に入られ、記憶と記録の継承のための時間は、もう残されていない。「今やらねば、豊かな川の文化が永遠に消えてしまう」との思いから、流域の人々を訪ね、聞き書きを重ね、『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』を執筆した。

**活動の効果・社会への波及効果：**  
 地元の新聞（新潟日報、越南タイムズ）や読売新聞新潟版などが『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』を取り上げてくれたため（添付記事参照）、流域の自治体・漁協・学校・図書館などに本書が配備され、川の文化の継承に活用されているほか、多くの漁師や住民、ダムを管理する電力会社の方たちまで、本書を購入してくれた。南魚沼市の六日町小学校の一年生によるカジカの稚魚放流の様子も、本書で紹介している。地元自治体より、本書に基づく講演も依頼されており、コロナ禍の収束を見て実施される予定。著名な河川工学者で新潟大学名誉教授の大熊孝先生（2020年度、毎日出版文化賞、土木学会功績賞&出版文化賞をトリプル受賞された）からは、「地球温暖化が進み、自然のあり方は大きく変わる中、再び自然との共生が求められる時代になる。その時、本書で示された川との共生関係がお手本になるに違いない」とご高評を賜った（添付の新潟日報書評参照）。

**活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦労された点：**  
 現役の川漁師は、漁りが生業であるがゆえに、すべての人が漁りの手の内（漁の技術や工夫）を語ってくれるとは限らない。そこで何度も足を運び、当方も漁撈を深く愛する者であることを知っていただいた。あるとき、漁師のリーダー格の方が、漁師仲間に向かって「この人は俺たちの仲間だから」と伝えてくれたときは嬉しかったし、以後の取材が円滑になった。本にまとめるための取材は時間との闘いだった。62名の方に取材にご協力いただいたが、その中には本の完成を見る前に亡くなられた方もいる。本を直接お渡しできなかったことが残念でならない。モクズガニ漁師は取材時には2名いらしゃったが、1名に減ってしまった。魚野川木造船の舟大工、片山さんへの取材は、造船所の解体前日、造船所の最後の日だった。ほかにも、そういうことがあり、ギリギリ消えゆく前のタイミングに間に合えたのは運もよかった。

**活動の今後の計画：**  
 これからも魚野川流域の人々と川について語り合い、著書や講演、地元漁業協同組合の教育活動への参加などを通じて、川の魅力を伝え続けたい。  
 私の地元、埼玉県の入間川流域でも、小学校の授業で川の魅力を伝えている（添付の『BE-PAL』記事参照）。魚野川、並びに川に対する私の気持ちは不変です。

応募推薦者（必要な場合にご記入下さい）	
氏名	推薦の言葉：
所属	
氏名	推薦の言葉：
所属	